

絵画のなかで / へ

Going In / Into the Painting

近藤恵介 | 伊庭靖子 | 渡辺泰子 | 古川日出男
Keisuke Kondo | Yasuko Iba | Yasuko Watanabe | Hideo Furukawa

企画：近藤恵介

2012年3月17日(土)～4月8日(日)

12:00～19:00 月曜、火曜、祝日休廊

MA2Galleryでは、画家である近藤恵介による企画展「絵画のなかで / へ」を開催いたします。

本展では、それぞれさまざまな絵画的な状況からスタートして、制作をおこなうことで経験を積み、その経緯のなかに作品がある、という時間のながれを俯瞰するような展覧会となります。美術館やギャラリーで目にする作品は作品そのものだけで成立しておらず、周りの環境、社会の状況、美術史や作家の個人史などが複雑に絡み合っています。限りなく豊かなそのような状況を、それぞれに経緯をもつ作品を通してご覧いただければ幸いです。

出品作家には近藤恵介をはじめ、同年生まれの渡辺泰子、画家としての先輩にあたる伊庭靖子、そして近藤の絵画のなかに文字を書き入れることで関係した古川日出男を迎えます。

また、近藤恵介と古川日出男による出品予定作品と関連する展覧会「覆東方恐怖譚」が代官山の蔦屋書店で開催されます。

M A 2 G a l l e r y

渋谷区恵比寿 3-3-8 tel.03-3444-1133 ma2@ma2gallery.com www.ma2gallery.com

近藤恵介 関連情報

「覆東方恐怖譚」 古川日出男 | 近藤恵介
2012年3月26日(月) - 4月22日(日)
代官山 蔦屋書店 東京都渋谷区猿楽町 17-5
お問い合わせ 03-3770-2525

月刊「美術手帖」2012年4月号(2012年3月17日発売)にて
古川日出男・近藤恵介による共同作品が4ページにわたり誌面展開。
美術出版社 <http://www.bijutsu.co.jp/bt/>



Statement

「絵画のなかで／へ」展に寄せて 近藤恵介

絵を描くという行為を、絵の具を支持体に接触させることから飛躍させて、絵筆を動かさずに描いたものを眺めるという時間までも含み込み、絵の周り(作業台であったり、部屋であったり)との関係を考慮し、さらには家やスタジオを出て絵を描くこととは直接的に関係しない様々な行為にまで連続させる。そして、このことを通して世界を知り、考える。これら一連のことすべてをひっくるめた状態が絵を描くということなのではないかと思います。絵を描くということから出発し、絵画的な状況に身を置きながら、絵画という場を押し広げ、行為のなかで見出された景色をそれぞれの作家が様々な方法で現出させたものが作品となるのです。そこは本当に様々なものを許容する場なのです。

展覧会のタイトルは作曲家・武満徹の『森のなかで』『海へ』という曲のタイトルから来ています。森のなかで考えたことや、海への指向性が曲になったものです。その、「森」の部分を「絵画」に置き換えて、「海へ」の「へ」を残し、ふたつを繋げたのが「絵画のなかで／へ」です。この2曲が収録されたアルバムを聴いていたことと、何となくイメージしていた企画プランとが解け合ってクリアなイメージを結び、今回の展覧会を実現するに至りました。また、『森のなかで』は3曲の小品からなっていて、その最初の曲は絵画からインスピレーションを得て作曲されたものです。



紙に、絵
岩絵具、水干、膠、墨、鳥の子紙 25x25cm 2011



死ぬ草 絵・近藤恵介／文・古川日出男
岩絵具、水干、膠、墨、鉛筆、鳥の子紙
26.5x26.5cm 2011

伊庭靖子さんのこと

伊庭さんの作品を初めて目にしたのは森美術館での展覧会「秘すれば花」でした。出品された作品は四角いキャンバスのなかに四角く白い枕や布団が配置されていて、キャンバスの枠とモチーフの枠が緩やかに重なり、更にモチーフの白とキャンバスの白とが重なるような一見シンプルな作品でした。しかし画面から立ち上がる独特の質感は精密な写実だからこそ成立し得るもので、その確かな技術のもと、キャンバスと選び抜かれたモチーフの色や形が無理なく鮮やかに接続されている様子はとても新鮮な驚きでした。制作前の状態から時間を経て完成した目の前の作品は、絵を描く時間そのものが結果として画面に定着しているようでした。制作する前のまっさらなキャンバスと、完成している現在の画面を「絵を描く」という行為が結ぶような。

また'09年には、資生堂ギャラリーでの水沢勉さんとのトークショーを聴講しました。質疑応答のときにぼくも質問をしました。質問内容は、キャンバスの上に絵の具を載せて茶碗や壺を描くことと、それら器のなかに描かれた絵付けの絵を描くこと、の二重の構造についてでした。ぼくがそのような質問をしたのは、以下の理由からです。キャンバスの上に絵を描き、それは同時に絵付けの絵をも描くことになっていて、絵付けの染料の上にはさらに釉薬も塗ってあることが示されていて、でもやはりそれは油絵で、、と作品のもつ多層的な構造に興味を惹かれたからです。伊庭さんは返答の際「そんなこと考えていなかった」と仰っていましたが、その言葉が示すように、絵の前に立つと自然とそのようなことは忘れてしまい、絵画を見る喜び、というようなシンプルな感慨にひたるのです。絵に描く対象を尊重したうえで描きたい部分を抽出し、絵画に対する素直で真摯な思いを携えて制作されているのだな、と感じることができました。しかし、展覧会場を出て絵から離れてみると、ふつふつと再び「層」のことを考えてしまうのです。このようなことを何度も繰り返しました。そして、伊庭さんが制作中に、意識的であれ無意識的であれ、いくつもの層を横断し、絵画のなかに分け入るように制作を続けた末にあのような画面が立ち上がってくるのだらうと想像しました。

絵画のなかに身を置き、絵画的な経験のなかから次の作品や状況へ身を投じてゆくような制作に対する姿勢や、絵を描き続けることで更新されてゆく作品群をみては、ぼく自身の作品にもフィードバックさせていました。

ちなみに、展覧会のプランを思いついたときに最初に思い浮かべた伊庭さんの作品は、2010年のMA2ギャラリーでの個展の際のシダ植物が縫い付けられたクッションの絵でした。ぼくはその絵をみたときに、長谷川等伯の《松林図屏風》を連想しました。それが覚え書きにも書いた、武満徹の『森のなかで』と繋がるきっかけのひとつとなりました。

2012.1.1

近藤恵介

(伊庭さんへ送ったメールから抜粋、改稿)



untitled
油彩、キャンバス 60×60cm 2010



untitled
油彩、キャンバス 70×70cm 2009

渡辺泰子さんのこと

渡辺さんとは'08年に金沢で開催された展覧会で同じ出品作家として知り合いました。それ以来いつかまたご一緒できればな、と常々思っていました。というのも、金沢展に出品された作品(赤いフェルトが海を航海する帆船へと形を変えた作品です)とそれを設置する渡辺さんの手際をずっと忘れられずにいたからです。そのときは作家本人より先に作品が到着したので、同梱の指示書のもとスタッフが作品を組み立てていたのですが、全然うまくいかずに困り果てていた頃に渡辺さんが到着して、いくらやってもダメだったフェルトを慣れた手つきで扱い、一気に作品を立ち上げました。これまでだらっとしていたただのフェルトが、しっかりとあるべき形へ変態したのです。そのうえ、それまではなんでもなかった土壁に練り込まれていた雲母が夜空の星のように見えてくる!、という一連の行為を目にして、これがアーティストなんだ、と深く感動したことをはっきりと覚えています。

その後、ギャラリー・サイド2での個展「starlight star」や武蔵野美術大学内gFALでの個展「TEMPESTOSO /FANTASTICO」を観賞し、絵画(ここではあえてこのように言います)をひねったりねじったり(それは実際の行為だったり、イメージのうえであったり)しながら作品をつくっているのだと実感し、前にみた赤いフェルトの作品と照らし合わせると妙に腑に落ちたのです。コンセプトがあり、それを具現化するアイデアを練り、試行錯誤の末に作品が立ち上がる。渡辺さんの作品からはそのような経緯がそのまま作品となったような印象を受けます。完成した作品の少し手前のはみ出た部分や完成の少し先、あるいは直接的には作品に関係のない裏側の部分をもしっかりと見通すことができるオープンな作品なのです。

今回出品いただく《Geothermal heat 03:00》というカラフルで小さいフェルトをボンドで固めた作品は、遠くに連なる山のようにもみえるのですが、モノとしては目の前すぐにまで寄って見ることが出来ます。遠くなのにすごく近い、この距離感の飛躍こそが渡辺さんの作品がもつスケール感を生じさせているのだと思います。

2011.12.29

近藤恵介

(渡辺さんへ送ったメールから抜粋、改稿)



Geothermal heat 03:00
フェルト 3×10cm 2011
courtesy of the artist and GALLERY SIDE2



繰り返す彼方
フェルト 90×140cm 2008
courtesy of the artist and GALLERY SIDE2

古川日出男さんのこと

小説家である古川日出男さんとは'11年にギャラリー・カウンタック清澄にて「絵東方恐怖譚 近藤恵介 | 古川日出男」という展覧会を開催しました。2人展の形式をとり、絵画と文章の関係を天平時代の絵巻物《絵因果経》にまで遡ることから制作を始めました。古川さんの文章をのせる為の器としても機能したぼくの絵画は、物理的に古川さんによって文字を書き入れられることにより完成をみました。画面のなかに直接他人の作家的行為が入り込むことで、絵画という場が広がることを実感するきっかけとなりました。

カリグラフィックな魅力をもつ古川さんの書き文字は、絵の主題、支持体の素材やサイズ、そして筆記具によってどんどん変化をします。文字がもともとは絵画でもあったことが、古川さんの文字をみることではっきりと思い出すことができるのです。人類の記憶として。

古川さんの文章／文字があって、ぼくの絵画があって、それぞれが影響をし合うことで新しい景色（比喩ではなく、そのときつくられた作品群は風景を扱ったものでした）をみることができました。

2011.1.20

近藤恵介



「絵東方恐怖譚」公開制作の様子
2011年 Gallery Countach 清澄
撮影：川村麻純

近藤 恵介 Keisuke Kondo



1981年福岡県生。東京芸術大学美術学部絵画科日本画専攻卒業。主な個展に「絵画の身振り」Satellite、岡山(2010)、「このへんからそのへん、そしてあそこへん」Gallery Countach、東京(2009)、「project N 34 近藤恵介」東京オペラシティアートギャラリー、東京(2008)、「毎朝歩く道について寝る前に考える」、トーキョーワンダーサイト本郷、東京(2006)。主なグループ展に「小さい良い絵画 近藤恵介×須藤由希子」Satellite、岡山、「絵東方恐怖譚 近藤恵介 | 古川日出男」Gallery Countach 清澄、東京(2011)、「あっけない絵画、明快な彫刻 近藤恵介・富井大裕」、Gallery Countach 清澄、東京(2010)「Re:Membering - The Next of Japan」、Alternative Space LOOP / Doosan Gallery、「My story - ひとりあそび」、MA2 Gallery、東京(2009)、「モンブラン・ヤングアーティスト・パトロネージ・イン・ジャパン」、銀座モンブラン、東京(2008)、「東京画——ささやかなワタシのニチジヨウのフーケイ」、トーキョーワンダー サイト渋谷、東京(2007)、「セカンド・ライン」、アドホック・アート、ニューヨーク(2007)など。小島ケイタニラブ、近藤恵介、鈴木雄介、蓮沼執太、古川日出男 による「the coffee group」でアートワーク担当。

伊庭 靖子 Yasuko Iba



1967年京都府生。嵯峨美術短期大学版画科専攻科修了。タイムラークライスラーグループアート・スコープ'99 フランス・モンフランカンにて制作滞在(1999)。文化庁在外研修員としてニューヨークに滞在(2001-02)。主な個展に「まばゆさの在処」神奈川県立近代美術館、神奈川(2009)。東京を中心に各地で個展多数。主なグループ展に「Art in an Office - 印象派・近代日本画から現代絵画まで」豊田市美術館、愛知(2011)、「椿会展 Trans - Figurative」資生堂ギャラリー、東京(2010、2009、2007)、「DOMANI 2009」国立新美術館、東京(2009)、2007 Internaitonal Incheon Woman Artists' Biennale, The Metropolitan City of Incheon、インチョン、韓国(2007)、「ダイアログ コレクション活用術 vol.2」滋賀県立近代美術館、滋賀(2007)、「アートとともに」寺田小太郎コレクション 府中市美術館、東京(2006)、「秘すれば花：東アジアの現代美術」森美術館、東京(2005)など。神奈川県立近代美術館、群馬県立館林美術館などに作品がコレクションされている。

渡辺 泰子 Yasuko Watanabe



1981年千葉県生。武蔵野美術大学大学院造形研究科美術専攻油画コース修了。個展に、「TEMPESTOSO / FANTASTICO」gFAL、東京(2011)、「starlight star」GALLERY SIDE2、東京(2010)、「chorus」GALLERY SIDE2、東京(2008)、「ラテンデー」ギャラリー山口(2006)。グループ展に「TRANSACTION」古川弓子/渡辺 泰子 GALLERY SIDE2、東京(2008)、「Formless Life」村住 宅 1 階、金沢(2008)、「Art Award Tokyo」行幸地下ギャラリー、東京(2007)、「上を向いて歩こう」naca・NPO法人アートコア青森、青森(2006)がある。2010年、森美術館「ネイチャー・センス」展関連企画MAM SCREENで六本木ヒルズ各所、TOHO シネマズ六本木ヒルズにて映像作品が上映され、2012年11月には、府中市美術館、「虹の彼方」展に出展。

古川 日出男 Hideo Furukawa



1966年福島県生。小説家。著作に『13』『沈黙』『アビシニアン』『アラビアの夜の種族』(第55回日本推理作家協会賞・第23回日本SF大賞)『中国行きのスロウ・ポート RMX』(文庫版『二〇〇二年のスロウ・ポート』)『サウンドトラック』『ボディ・アンド・ソウル』『gift』『ペルカ、吠えないのか?』『LOVE』(第19回三島由紀夫賞)『ロックンロール七部作』『ルート 350』『僕たちは歩かない』『サマーバケーションEP』『ハル、ハル』『ゴッドスター』『聖家族』『MUSIC』『4 4 4』『ノン+フィクション』『TYOゴシック』『馬たちよ、それでも光は無垢で』。対談集に『フルカワヒデオスピークス!』。執筆のかたわら、文学の音声化にも積極的に取り組み、雑誌「新潮」に朗読CD『詩聖 / 詩聖 日本近現代名詩選』(2007)を特別付録として発表。日本の商業文芸誌では初の「CD付き」になる。他に雑誌「早稲田文学」に200分に及び朗読DVD『聖家族 voice edition』(2010)、朗読CD付きの書籍『春の先の春へ』(2011)。「the coffee group」の小説と朗読担当。CD『ワンコインからワンドリップ』(2010)をリリース。その他異ジャンルとのコラボレーションに、ロック・ミュージシャン向井秀徳(ZAZEN BOYS)との全国4都市ツアー(2007~2008)、コンテンポラリー・ダンサー黒田育世(BATIK)との共同制作舞台『フ、ブルー』上演(川崎市アートセンター、2009.2)等。音楽家植野隆司、イトケン、戸塚泰雄の3名と共に演じたフルカワヒデオプラス名義の朗読CD『MUSIC: 無謀の季節』(2009)をHEADZ から発売。